氏　　名　塩（しお）　井（い）　かおり
学位(専攻分野)　博　　士　(地球環境学)
学位記番号　地 環 博 第　42　号
学位授与の日付　平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件　学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻　地 球 環 境 学 舎 地 球 環 境 学 専 攻
学位論文題目　サン・ピエトロ大聖堂再建事業におけるミケランジェロの計画案
——西洋の歴史に見る建築家像——

論文調査委員　教 授 小 川　　侃（主 査）　准教授 柏　　久　教 授 岡 田 温 司

論　文　内　容　の　要　旨

本論文では古代ギリシア語の $\alpha\rho\chi\iota\tau\varepsilon\kappa\tau\omega\nu$ にまで遡る「建築家」という語が，中世に失われイタリア･ルネサンスで復活するという特異な歴史的経緯を持つことに注目し，この語が担う本来的な意味を探るべく，イタリア･ルネサンス最盛期に開始されたサン･ピエトロ大聖堂再建事業を取り上げた。実際この再建事業は100年以上継続されイタリア・ルネサンス最大規模となるが，その最初の四十年間，建築計画が難航し建築家が次々と交代する中で，建物の全体構成さえもが未決定の状態で工事が続行されていた。本論文では，この初期の建築計画に焦点を当て，建築家の意図を探った。全体は四章からなる。

第一章では，まず事業初期の計画過程を概観した後，先行研究を振り返った。長堂式と集中式の 2 タイプの計画案が作成されていた事実は，ルネサンスの建築理論書にも明記されている。だが建築計画が何度も大々的に変更された理由に関しては諸説があり，近年では施主であったローマ教皇の計画介入を取り上げるのが主流となっている。建築家の意図のみならず，当時の政治的経済的な影響をも考慮した解釈である。

しかしこのような解釈にも疑問点があることから，事業初期に作成された計画案の中でも代表的とされる五つの平面図を比較検討し，その傾向を探ることとした。結果的には，平面図がいずれも左右対称の原理に厳密に則って構成されており，最初の建築家であったブラマンテの方法論が踏襲されていた可能性が見えてきた。中世に建造されたゴシック大聖堂では異なったシステムの併置を許容していたのに対し，初期ルネサンスのブルネレスキに至って，建物全体を論理的―数学的連関として統一するようになるが，左右対称の原理を建築計画に積極的に導入するのは，レオナルドやブラマンテになってからだからである。サン･ピエトロ大聖堂再建事業においても，建築家はこのブラマンテの設計法に則って全体を有機的組織的に統一しようとしたために，一部の変更が連鎖反応を引き起こし，建物全体の再設計を余儀なくされたと考えられる。

第二章では，最も影響力があったとみられるブラマンテに焦点を絞り，彼の建築活動全般を視野に入れて，如何なる方法論を採用していたのかを考察した。ここで問題となるのはブラマンテ自身が著した建築理論書が現存しないことである。先行研究を見ても，ブラマンテに関しては実践重視の姿勢で新しい建築スタイルを創り上げたとされている。しかしこの建築家の作品を見る限り，方法論上の改革に留まらず，新しい考え方を導入していた可能性は否定し得ない。そこで本章ではブラマンテがミラノでレオナルド・ダ・ヴィンチと接触していたこと，新カント派の哲学者であるカッシーラーがレオナルドをルネサンスの思考の転換点として捉えていることに目を付け，カッシーラーのレオナルド解釈の適用可能性を検討した。

実際，カッシーラーは『個と宇宙』においてルネサンスの思考の包括的な解釈を試みた上で，レオナルドに至って自然の「必然」と人間精神の「自由」を対立して捉える中世的な思考法が変革され，双方の間に相関関係が成立することを指摘している。端的に言えば数学によって経験を方向付けるという仕方でレオナルドは対象の真理性を把捉しようとしたのである。この方法論を建築にも適用していたことは，手稿に残された教会堂の平面図や鳥瞰透視図から窺える。またブラマンテに関しても，彼と関連のある教会堂が中央イタリアやロンバルディア地方に多数建造され，それらが幾何学図式を組み合わせた

平面構成で，すべての要素が密接に関係付けられた機械の如くであることから，同様の方法論を教会堂の建築計画に導入していたと考えた。しかもレオナルドは教会堂の中央にドームを架け，天空へと拡大する空間を創り上げており，同様の特徴はブラマンテの影響下で建造された教会堂にも見られる。これらを根拠にレオナルドやブラマンテが教会堂建築を人間精神の「神化」の場として新たに規定付けたことを指摘するに至った。

本章ではさらに，教会堂以外のブラマンテの作品についても，主知主義的傾向が顕著に見られるという先行研究を参照しつつ，1500年代初頭に建造されたデッラ･パーチェ修道院の中庭を取り上げ，同様の方法論を適用していた可能性が高いことを示した。

第三章では，もっぱら前章での議論を，より広い視野から捉え直すことに終始した。すなわち初期ルネサンスの代表的な建築家であるブルネレスキやアルベルティに注目し，彼らに対してもカッシーラーの解釈が適用可能であるかを検討した。またカッシーラーの論述に従ってルネサンスの思考の変遷過程を再確認した上で，レオナルドの哲学的思考をさらに詳細に検討した。これらの考察を踏まえ，サン･ピエトロ大聖堂の再建事業においても，建築家が前章で示したレオナルドやブラマンテによる教会堂建築の意味規定を継承していたと結論付けるに至った。

第四章では，サン･ピエトロ大聖堂再建事業初期に建築計画が何度も大々的に変更されたという事実に立ち戻り，このことと前章までの考察とが矛盾しないかを検討した。そして最終的にこの混乱状態から抜け出したミケランジェロが，何を根拠に事業規模の縮小に踏み切ったのかを考察した。

試行錯誤を永遠に繰り返すというのは，実はレオナルドの素描に見られる際立った特徴でもあったことから，この点に関してもカッシーラーの解釈を参照することとした。自然の「必然」と人間精神の「自由」との相関関係が成立するためには精神と自然すなわち認識対象との間に距離をとることが要求されるという。これによって知性を自由に拡張し，イデア的なものと感覚的なものとの真正な関係をどこまでも追求する可能性が開けるからである。さらに永遠に探求し続けることはレオナルドにとって人間精神の神的規定性を示す証でもあったことにカッシーラーは言及している。サン･ピエトロ大聖堂再建事業でも，ブラマンテをはじめとする建築家が同様の動機に突き動かされて再設計を繰り返した可能性が高い。加えて，レオナルドやブラマンテの方法論には解決不可能な矛盾が内在することを指摘し，これが建築計画を不安定な状態に陥れていた可能性にも触れた。

最後にローマ劫掠という政治的な出来事に向き直り，ここまでの考察を基に先行研究とは異なった視点からの解釈を試みた。その結果，サン・ピエトロ大聖堂再建事業でミケランジェロが建物の規模を縮小したのは，劫掠後にローマのイメージの早急な回復を期待する教皇庁の政策を反映したからだとする先行研究の指摘に加え，ブラマンテの方法論上の問題点を克服するためでもあったことを挙げた。すなわち全体が有機的組織的統一体となった教会堂を建設するために，ミケランジェロは建物の規模を押さえ，自らが管理監督可能な短期間に要所を完成し，後継者による再設計の可能性を極力抑えようとしたと解釈されるのである。

本論文では，イタリア・ルネサンスにおける一建築事業を取り上げたに過ぎない。だが建築家は単に政治的，経済的，実践的な要求に従って計画を進めていたのではないことが示されたであろう。そこではルネサンス独自の世界観を基盤に，まさに環境世界を如何に創り上げるかが最大の焦点となっていたのである。同様のことがわれわれの環境政策にも当てはまる可能性があり，この点を示唆したことを本論文の地球環境学への意義として挙げておきたい。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

塩井かおりの博士学位申請論文は，西洋の歴史に見る建築家像を探求しつつ，とりわけイタリア・ルネサンスの代表者であるミケランジェロのサンピエトロ大聖堂の再建計画を歴史的に跡付けるものである。その場合に申請者のもっとも重要な関心は，単に再建計画のみに限られるのではなく，むしろ再建計画の背景にある時代の状況の思想史的問題を明らかにしようと試みたものである。その際に申請者は，ニコラウス・クーザヌスの思想に注目した。このようなルネサンス独自の世界観は，とりわけドイツの，普通は新カント派に数えられるはずの，しかし，実は非常に大きな現象学や哲学史の全体に通じているエルンスト・カッシーラーの研究を引き寄せて考察すると良く理解されるという観点から，申請者は，彼の解釈に依拠しながらレオナルド・ダ・ヴィンチの役割を検討した。レオナルド・ダ・ヴィンチは，エルンスト・カッシーラーによる

とルネサンスの思惟の転回点にあり，自然の「必然性」と人間精神の「自由」との間の対立よりもむしろ相関関係を明らかにした。レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿に残された宗教建築の素描を検討しながら，さらにブルネレスキ，アルベルティ，ブラマンテなどの建築計画への継承を歴史的に跡付けた。最終的にはミケランジェロが教会堂の有機的な統一性を確保するために計画の規模を縮小し，己が管理監督可能な短い時間において建築を遂行したゆえんが明らかにされた。かくしてミケランジェロは，後世における後継者の再設計の可能性を極力抑えることに成功したということが明らかになった。この論点は極めて説得的である。

この博士学位申請論文は，地球環境学大学院の本質的な契機である人間と環境の相関構造を問う，人間環境共生基礎論分野において成立したものである。ルネサンスにおける建築の歴史は，人間と環境の関わりを研究する際に模範的なパラダイムとなるものであり，人間と環境の本質構造を解明する極めて重要な論文である。本博士学位申請論文のほとんどの部分は，すでに学会誌などに投稿受理されており，高く評価されたものである。

人間は地球環境学の本質的な契機であり，本論文は人間存在の環境世界との関わりの歴史的な解明を行い，これにより地球環境学の発展に大きく貢献した。よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成20年２月１日，論文内容とそれに関連した事項についての試問を行った結果，合格と認めた。